

空



2009年

**SORA** 26号

箱庭(26) | 2  
柴田 佐知子

道の端は青き奈落や  
遍路杖

一樹より闇に湧きつぐ  
花吹雪

泣いて鬼さらに奥へと山桜

ふらここや空に入るたび嬉しくて

よく晴れて鳩は虹色仏生会

山雀を水甕として櫃の花

諭しみる子猫がじやれる跳びはねる

杖ついて父と母立つ春夕べ

## 鳥帰る

青山

悠

梅の芽や縁まで満ちし人造湖  
 墓掘つて通す新道雲雀東風  
 三月やしなやかに来る蛇の目傘  
 耕して札所につづく棚田かな  
 溪流に桜葉ふる札所道  
 誰も来ぬ番外札所花は葉に  
 玄海の見ゆる高さに遍路宿  
 猫峠越えて春ゆく納め杖  
 湖とまがふ暮春の博多湾  
 大いなる寝釈迦の空を鳥帰る



・酔・

人は飲酒が過ぎると思ってもよらない行動をすることがあるらしい。

十数年前の四月のことである。その頃、家は建替え前の古い家で、裏の庭には子供達が作った小さな泉水もあった。朝、目覚めてその庭を見て驚いた。靴脱ぎ石に新しい紳士靴が揃えてあり、庭石の上には真新しい背広、ネクタイそして肌着や靴下まで綺麗に畳んで置いてある。何か事件でも起きたかと慌てて辺りを探したが何も見つからない。何とも気味が悪い。仕方なく背広をさぐると財布と名刺が出てきた。名刺の住所は我が家からそれ程遠くなかった。電話すると、昼過ぎに若い男性が菓子折りを持って恥ずかしそうにやってきた。

就職したばかりの彼の話によると、前夜、新入社員歓迎の酒宴でひどく酔って帰る途中、開いていた我が家の横門から裏庭に入ったらしい。「家の佇まいが故郷の実家に似ており錯覚したようだ」とのこと。ほっとして一風呂浴びようとでも思い服を脱いだのかもしれない。

三月に九州大学を卒業して社会人となったばかりの彼は、深夜の道をたからと裸で帰ったのであろう。

## 金盞花

秋 千晴

あやふやな貌に子猫の生れけり  
 春立つや髪分け目をはつきりと  
 さつきまでつんつんした子金盞花  
 銀行のどの窓口も桃の花  
 囀や犬は宝を埋めてをり  
 春の鴨おもちやのやうに寄つてきし  
 手に握るげんげの高さ揃へたり  
 片側に土盛り上げて蚯蚓出る  
 足裏まで赤子ふつくら麦の秋  
 蝸牛黄色い傘に囲まれて

・茶道のお家元の講演で・

「今の日本の人間関係は『と』の関係  
 になっています。私はこの『と』が日本  
 を悪くしていると思います。例えば『自  
 分の会社』という気持ちが大切で『自分  
 と会社』では切り離された関係になって  
 います。給料さえもらえばいいというの  
 であれば会社は発展しません。『先生の  
 生徒』『生徒の先生』の関係はあなたの中  
 に私がいる。私の中にあなたがいると  
 いう関係が築かれていくのです。」

このお話を聞いて以来「の」の関係を  
 大切にまた「の」に置き換えて考えるよ  
 うになりました。

日本人みんなが「の」の関係を意識す  
 れば雇用問題やいじめや自殺も解消され  
 ていくのではと思います。美しい優しい  
 日本を家元とともに願いを同じにした桜  
 咲く一日でした。



## 人柱

あさなが捷

雀らのなで肩すぐる春の風  
 草餅をほほばるすこし父のこと  
 ゆつくりと渦に寄りゆく花筏  
 ふらここを大きく漕ぎて島を越ゆ  
 整列で終れり少女どんたく隊  
 あきらめしごとくに消ゆる螢かな  
 人柱呑んで大きくさみだるる  
 寵競ふことはうたかた半夏生  
 波乗りの波うら返し降りてきし  
 炎天や鎌首あげてクレーン車

学習教室に通って来る子はいつも私を楽しませてくれます。

T君が私に直面して教材を解いた日のこと、教材は五枚位を左上で留めてあるのですが二枚目以降に掛かると前のページが採点している私の手許にかぶさってきて、仕事がいやにくいです。それでT君に少し横に移動するか教材を折って後ろにたたんでくれるよう頼みました。

どうしてなのか聞くので理由を話し、「そういうのを、おもしろいというのよ」と、一年生ではわからないよねと思いつきながら付け足しました。

次の教室日、T君が慣れない手つきで教材をたたんでいたので「おぼえていてくれたのね、ありがとう」というと、「おもしろい？」とにつこり。大人になったときおそらく彼はこの会話の記憶はないだろうけれど、このことは私を幸せな気持ちにしてくれました。

願わくは、地球上から飢えや争いがなくなり、すべての大人も子供も互いを思いやれる日が来んことを。

## 目安箱

小林 朱夏

朝風が夕風となる豆の花  
制服の白線しろし花の中  
蜂の巣の震へる時のありにけり  
黄塵やいつも胸張る風見鶏  
朧夜の眼鏡屋は灯にをさまれり  
地球儀をゆつくり廻す春愁ひ  
初夏の風入れ身体検査の日  
白南風や校舎の角に目安箱  
霊峰に衍生まるる山開き  
麦藁帽ゴム伸びきつて顎の下



最近とみに食事作りが億劫になってきた。幸いなことに何でも食べる夫なので助かっているのだが、時々おかしなことを言い始めた。連れ立って買物に行くとき「それはあんまり…」「こっちのほうか…」水臭いではないか。好き嫌いがあったのなら、所帯を持ったときに言っておくべきだった。時間をかけ、常に心がけて嫌いな物を食卓に出して夫が少しずつ諦めの境地になるように協力を惜しまなかったものを。つくづく仲よく老いることは難しいと感じるのであった。

# 葱坊主

苑 実 耶

一本桜四方八方より眺め  
目眩せり一本桜仰ぎ見て  
次の世はあるかもしれぬ夕桜  
一升瓶どんと据ゑられ御開帳  
泣けば済むさうはいかない葱坊主  
藤棚の下に広がる曲げわっぱ  
日だまりのちゆうりつぷ赤くしどけなく  
嫁ぎゆく姉と連弾青葉の夜  
春の日や子の前髪を切り揃へ  
八方に緑ひき連れ五月来る



・悪石島アクシマ

国際宇宙年の今年七月二十二日は、トカラ列島で皆既日食が見られる。トカラ列島とは、屋久島から奄美大島までの間にある十の島の総称で、その中の悪石島が観測のポイント。

悪石島は若かりし頃、人形劇などを持って訪問したことがある。現在の島の人口は七十人、今はフェリーがあるが、あの頃は島にあがるのに船に乗り換えた。泊まらせてもらった小中学校は建てかわり、道路が舗装されている。携帯電話も使える。あの頃とは比べようもなく便利になっている。しかし、今にも降ってきそうな星々、どこまでも青い海はそのままと思う。

皆既日食と共に、悪石島の様子が見られるのを楽しみにしている。



## 春一番

高倉恵美子

病床の一日長し春の雨

病室に卒業証書見せに来る

車椅子少し上手に豆の花

看護師のふるさと遠し春一番

退院す庭の牡丹の盛りなり

囀りの下に手すりを付けてをり

筍を征服したる夫の鋤

春泥を飛ばしてゆきしトラクター

連山の麓のさくらさくらかな

夫頼ることにも慣れて四月尽



今年は蓮華の花が綺麗だ。農家の後継者に若い人が多くなり、麦を作らなくなつた。その田を利用して養蜂家が蓮華の種を蒔き蓮華畑が広がつたのである。子供の頃の昔なつかしい光景である。

しかし、蓮華田の中に蜂箱がない。不思議に思つていたら蜂箱は離れた畑に置かれていた。蜂は二キロ四方を飛び回る。そうで離れた場所に置くのだそうだ。蜂は苦手だが蓮華を遠くから見ている限りは美しい田園風景である。

## 花曇

樋口みのぶ

寒明けの水面を揺らす鯉の群  
下萌やせせらぎ分かつ県境

鏡台に母の眼鏡や花曇

彼岸会やはらからの声みな太く

母と訪ふ父のふるさと枸杞の花

囀りや髪を豊かに弁財天

雨のあと畑くろぐると金鳳花

見おろせば照りまつすぐや白牡丹

使はれぬ木偶は頭を垂れ春の暮

裏木戸に廻れば匂ふ梅筵



福岡城址に桜を見に出かけた。染井吉野も紅枝垂もそれは見事だったのだが午後でもあり人が多くて早々に退散した。今度は午前中のそれも早めに出掛けた。もう場所取りのビニールシートがあちこちに敷かれていたが、雨上りの城址は風もなく人影もまばらだった。雨後の幹の黒さが余計に花の色を際立たせている。桜を独り占めした気分がゆっくり歩く。城内の奥の一角に足を向けて息を呑んだ。

朝の水蒸気を含んだ静寂の地を大桜がぐるりと囲んでいる。桜の精気に満ちたその一角は人が立ち入ることができない聖域のように感じられその場を動けなかった。

後日行ってみると、あの聖域はどこにでもある葉桜の風景に戻っていた。